

■米マサチューセッツ工科大学(MIT)での留学生活は「地獄の日々」だった。

はつきり言って、授業

の内容は最初、何が何だかさっぱりわかりませんでした。そもそも話している英語がよく理解できません。情報技術系の科目だけは実務の経験があつたので一応内容も理解できましたが、会計やファイナンスといったそれ以外の科目はよく分からないうえに、英語でやるので輪をかけて分かりませんでした。

それでもやらないわけにはいかないので、必死に勉強しました。月曜日から木曜日までは、その日の授業が終わると夕方6時まで学校で勉強して、その後は家で夜中の12時まで勉強しました。さらに24時間オーブンしている学校の図書館に行

## 英語さっぱり自信喪失

つて、朝まで勉強して授業に臨みました。睡眠はよつと仮眠する程度です。体が丈夫だったのが幸いでした。

木曜日の夜は毎週、学生同士が交流を深めるための飲み会があつて、そこでビールを飲んでから熟睡します。金曜日はリフレッシュのためにテニスをして、週末はまた勉強。そんな日常生活でし

た。

英語も何とかしなくてはと思い、米国人の家庭教師を付けて、週1~2回、ディスカッションをしたり、発音を直してもうたり、書いたエッセーを見てもらったりしていました。

それでも授業についていくのは大変でした。

時は、「これは絶対に卒業できない」と真剣に心配したこともあります

いんだ」などと、卒業

できなかつた時の言い訳を勝手に考えて自分を慰めることもあります。それまで築き上げてきた自信や自負をすっかり失っていました。

大変だったのは授業だけではありません。1学期が終わつた後に日本から家族を呼び寄せると、

子供がいきなりひきつけを起こして救急車を呼ぶ羽目になりました。一

瞬、最悪の事態が頭をよぎりました。留学生生活の特に前半は、今思い出しても苦しい思い出しかありません。まさに地獄のような日々でした。

（聞き手は猪瀬聖（フリージャーナリスト））

日経Bizアカデミーより転載